令和元年度伊豆市新中学校整備基本構想

2020.03.23.

共同設計・高橋茂弥建築設計事務所共同体

目次

はじめに
1. 新中学校のコンセプト
1-1. 新中学校の目指す基本理念 ……1
1-2. 学校づくりの７つのコンセプトとそれを実現する方策 ……1
1-3. 伊豆市内3中学校と土肥小中一貫校の新中学校に対する思い ……3
2. 計画条件
伊豆市新中学校の計画条件 ……4
3. 新中学校候補地の検討
3-1. 整備方針 ……5
3-2. 候補地の位置 ……5
3-3. 候補地と周辺状況 ……5
3-4. 現修善寺中学校　敷地 ……6
配置図
平面図
3-5. 日向地区　敷地 ……9
配置図
平面図
3-6. 各候補地のまとめ及び考察 ……12
3-7. 候補地の比較表 ……13
4. 計画地の選定
4-1. 日向地区内における敷地範囲の選定 ……15
4-2. 現況地盤高 ……16
4-3. 農用地区域の現況 ……17
4-4. 日向地区の災害指定区域 ……18
4-5. 日向地区計画案
・A案　敷地範囲 ……19
配置図
校舎平面図
・B案　敷地範囲 ……22
配置図
校舎平面図
・C案　敷地範囲 ……25
配置図
校舎平面図
4-6. 各計画案のまとめ及び考察 ……28
4-7. 敷地範囲の比較表 ……29
5. 先進校を参考にした新中学校に求められる空間や設備 ……30
6. 新中学校の通学に関する現況調査
6-1. バス通学について ……32
6-2. 自転車通学について ……33
7. 概略事業工程表 ……42
8. 概算工事金額 ……43

はじめに

はじめに

平成16年4月、4町が合併し伊豆市が誕生した。しかし、少子化が顕著で、学校の小規模化が進んできたため、平成20年8月、教育委員会では、伊豆市教育振興審議会（以下審議会という）に対し「小・中学校の適正規模と適正配置について」を諮問し、平成21年1月に出された答申書をふまえ、「伊豆市学校再編計画」を策定した。この計画に基づき、平成22年から土肥地区、中伊豆地区、天城湯ヶ島地区の小学校が順次再編され、8小学校が3小学校となった。

その後、今後の児童生徒数の推移、小・中学校の学級編制の状況、中学校の教科担任制や部活動の現状を考慮し、平成26年2月、「第2次伊豆市学校再編計画」を策定した。市内4中学校の再編の方針として、距離が比較的近い修善寺・中伊豆・天城の3中学校は1校に再編することをめざした。

一方、土肥中学校は、土肥地区ならではの9年間を見通した地域との連携のよさを生かした教育を進めること、また、地理的要因による生徒の通学に要する負担を考慮し、「施設一体型小中一貫校」として土肥小学校と再編成する方法を選択し、義務教育学校「土肥小中一貫校」として開校をめざした。

平成29年5月、伊豆市議会において、文教ガーデンシティ計画とともに新中学校に係る計画が白紙に戻った。その後、市民から「中学校教育環境改善に関する請願書」が、伊豆市議会において採択された。伊豆市教育委員会では、平成29年7月「修善寺・中伊豆・天城湯ヶ島地区の中学校のあり方について」を審議会に諮問し、中学校教育のあるべき姿や教育環境全般について、ゼロベースから10年後、20年後を見据えての審議をお願いした。以後、8回に渡る審議会では、現状と課題を認識いただいたうえで、現状存続（改築）、各地区小中一貫校、統合等の形態と生徒のより良い教育環境のあり方について総合的に審議し、平成30年6月に「答申書」をまとめた。「中学生にとってのより良い教育環境」を考えるのは私たち大人の責務との認識のもと「教育の質」「教育の環境」を中心に審議を重ね、「より良い教育環境としては中規模程度の生徒集団が必要であり、そのためには3つの中学校を統合すべきである」との答申内容が示された。

教育委員会では、答申内容の審議、文部科学省が目指す中学校教育のあるべき姿等の資料、答申内容に対する学校教員の意見を伺い、答申内容を尊重しつつ、教育委員会として中学校のあり方について検討を重ねてきた。また、請願の趣旨に示された議会・行政の一体的な取り組みとして、策定に際し議会議員からも意見を伺うプロセスを経て、平成３０年１１月に「伊豆市修善寺・中伊豆・天城地区の中学校基本方針」が策定された。その趣旨を踏まえ、３地区の中学校を統合するために考えられる客観的な事項の検討を行い、関係機関及び団体との調整・協議を重ねながら建設計画の検討を進めてきた。

市内3つの中学校の現状は老朽化が激しく、建て替えもしくは長寿命化の必要がある校舎であり、最も新しい修善寺中学校であっても、水道やトイレ、雨漏りなどによる不具合は喫緊の課題となっている。重ねて、少子化による単学級の出現や部活動数の減少などの課題を解消するためには修善寺中学校・中伊豆中学校・天城中学校の3校が統合し、新中学校を建設する方法が望まれている。

今回の新中学校建設は、単なる老朽化や少子化への対応だけではない。歴史ある3中学校を閉じ、その3校が融合した新たな中学校が誕生するのである。伊豆の豊かな自然の中で、多様な子どもたちの個性が伸び伸びと育つ場を地域が一体となって支える。そして、土肥小中一貫校とも連携しながら、伊豆の、そして日本の未来を担う人材を育み、伊豆市の未来につながるための中学校建設であることを肝に銘じて、この基本構想を策定することとする。

1．新中学校のコンセプト

1．新中学校のコンセプト

1-1．新中学校のめざす基本理念

旧町の歴史ある３校が統合し、新中学校として新たな歴史を築き、一緒になった良さを感じられる学校づくりの７つのコンセプト

1-2．学校づくりの７つのコンセプトとそれを実現する方策

1 「明日また行きたい学校、みんなの夢が育つ活力ある学校」

～友達と会える楽しさにあふれ、できるようになる嬉しさを感じ、
生きる喜びが生まれる学校～

［方策］
・成長に合わせた空間づくりを行い、学年が上がっていく実感や学年への帰属意識を抱くことが出来る施設計画とする。主な学校生活の空間である普通教室は、学年ごとにグルーピングし、その部分では他学年との動線が交錯しないようにし、学年のまとまりをつくる。
・各学年で学年に合わせた異なる個性ある空間づくりを行い、３年間の中学生活の成長体験を演出する。（3年間の素敵な旅を創出）
・体育祭や文化祭などの学校行事の活性化を図れるように、集団で活動する体育館やホールの施設・設備を充実させる。
・生徒が思い切って活動できるように、すべての部活動が学校敷地内で活動できる充実した施設を整える。
・一時的な子どもの数の変化による教室数の変動がおこっても、学年ごとのまとまりを確保しながら、教室配置ができるシステムにしておく。

2 「新たな学校として一体感が持てる学校のシンボルをしっかりとつくる」

～統合した新中学校として生徒の交流やまとまりが生まれる魅力ある中心部分をつくる～

［方策］
・学校内の日常動線の要衝の位置に、生徒の読書、学習、情報リテラシーなどを育む要としての充実した図書メディアセンターを配置する。
・全校生徒が集まって発表や交流が出来るスペースを屋内及び屋外の中心部分に配置する。

3 「生徒の一日を居心地の良い場に」

～学校で過ごす生徒や教職員などのすべての人々の気持ちに寄り添った居心地の良い
安心感が生まれる空間づくり～

［方策］
・ユニバーサルデザインを取り入れた、居心地、学び心地、教え心地のよい空間をつくる。
・生徒の色々な気持ちに合わせた様々な空間を配置する（一人になれるところ、少人数で語り合えるところ）。
・気持ちを切り替え、ほっとできる快適なトイレや水場（手洗いや水飲み）をつくる。
・一日の様々なシーンに合わせて居心地よく安心感が生まれるスペース（広い教室、移動のコリドー動線、ベンチでくつろげる広場等）を設ける。

4 「一人ひとりを大切にし、みんなが伸びる学校」

～個性を生かしながら、共に育ち、共生社会の形成に向けて、自然にインクルーシブ教育が生まれる学校。多様化する社会に対応する先を見据えた学校教育
（ STEAM 教育、Educaition2030 等）に呼応した環境をつくる～

［方策］
・画一的な特別教室ではなく、各教科の特徴に合わせた設えと様々なシーンを創出させる自由度を持った特別教室を設置する。それらは科学、技術、アート、語学などにグルーピングして配置し、廊下に面してメディアスペースを設け教材や生徒作品を展示できるスペースを併設させ、その教科の特徴を生みだし、教室内に入らなくても生徒たちにその教科の興味や学習意欲を引き出すスペースとする。
・日常的に自然な形で触れ合いが生まれる位置に特別支援学級を配置する。

5 「地域が支える、地域と共に育つ学校」

～新しい学区のシンボルとなって、これまでの３つの地域が融合し、
自分たちの学校として誇りが持てる学校～

［方策］
・地域の教育環境や生涯学習の場の整備と連携して、共に発展し、地域の人々に開くことで親しみを生み、活用してもらえる施設とする。
・3 地区の防災拠点となりスムーズな避難所運営が出来るようにする。文部科学省の指針に基づき、災害時には学校運営と共存できるように段階的な領域区分が設定できる計画とする。
・広域の学区から、どの生徒も安全に通学できるようにする。そのための幾つかの通学手段（徒歩、自転車、バス、自家用車など）にスムーズに適応した施設（屋根の架かったプロムナード、自転車置場、ロータリー、駐車場、放課後の居場所など）を整備する。

6 「先生にとっても働きやすく、子どもと共に成長したいと思える学校」

～職場環境を整備することにより、生徒に寄り添い、きめ細かい教育が生まれ、
子どもと共に成長しようという意欲につながる～

［方策］
・“チームとしての学校”を実現するための働きやすい校務センター（従来の職員室および関連諸室）を整備し、互いに高めあう研修スペース（教材作成や情報交換）、元気に働けるリフレッシュスペース（休憩や更衣）などを、様々な場面に応じた空間を整備する。

7 「時代の変化にフレキシブルに対応し、将来にわたって先進性を失わない学校」

～竣工後 50 年、100 年を見据えて、様々な施設の変容に容易に対応できる学校～

［方策］
・急速に進む ICT に対応できる情報インフラ（society5.0）を整備し、教室での学習のみならず、市内の小学校及び土肥小中一貫校とも連携をとりながら、高校や大学及び研究機関、地域の教育資源などを活用し、いつでもどこでも学ぶことのできるシステムの整備を行う。
・こども達に将来、必要とされる能力について見据え、技術の進展に対応する柔軟性のある空間づくりを行う。そのために持続可能で高機能な教育環境をつくる。
・サステナブルな建築をめざすとともに、余裕を持った構造計画、設備計画を行う。
・純ラーメン構造とし、間仕切りは乾式工法を採用する。
・将来の改変に備え設備スペース（天井内、シャフト、機器置き場など）に余裕をもたせる。

（註記）

インクルーシブ教育：（Inclusive Education ）人間の多様性の尊重等を強化し、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能にするという目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み 。

STEAM教育：Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（ものづくり）、Art（芸術）、Mathematics（数学）の 5 つの単語の頭文字を組み合わせた造語。これら 5 つの領域を重視する教育方針を意味する。この教育方針の目的は、現実の問題を解決に導く力や今までにないものを創造する力を育むことである。元々はアメリカが、科学技術分野での競争力を高めるために推進してきた教育方針で、日本でも「日本 STEM 教育学会」「STEAM 教育協会」が近年設立され、STEAM 教育は注目を集めている。

Educaition2030：（世界の教育制度に影響を与える OECD の提言。2030 年に向けた教育提言が 2018 年、現在進行形で取りまとめられている）先進国間の情報・意見交換を行うための国際機関 OECD（経済協力開発機構）が、2018 年までのプロジェクトとして掲げている Education2030。日本の学習指導要領改訂にもしばしば影響を与えてきた。

ユニバーサルデザイン：（Universal Design／UD）とは、文化・言語・国籍や年齢・性別などの違い、障害の有無や能力差などを問わずに利用できることを目指した建築（設備）・製品・情報などの設計（デザイン）のことである。

コリドー動線：建物の各部をつなぐ回廊。廊下。また、一般に通路。

文部科学省の指針：平成 26 年 3 月 7 日施設企画課による「災害に強い学校施設の在り方について～津波対策及び避難所としての防災機能の強化～」

チームとしての学校：中央教育審議会（平成 27 年 12 月答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」

society5.0：サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）。狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会を指すもので、第 5 期科学技術基本計画において我が国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱された。（内閣府）

サステナブル建築：設計・施工・運用の各段階を通じて、地域レベルでの生態系の収容力を維持しうる範囲内で、(1)建築のライフサイクルを通じての省エネルギー・省資源・リサイクル・有害物質排出抑制を図り、(2)その他地域の気候、伝統、文化及び周辺環境と調和しつつ、(3)将来にわたって人間の生活の質を適度に維持あるいは向上させていくことができる建築物を構築することを指す。

純ラーメン構造：主要構造部を柱および大梁で構成されたフレーム。原則、耐震壁などを用いない。

乾式工法：水を必要とするコンクリートや漆喰などの材料を使わずに、建築物を組み立てる方法。

1-3. 伊豆市内３中学校と土肥小中一貫校の新中学校に対する思い

各学校に統合に関する質疑項目をまとめた調査票を作成・配布し、
また、各学校長にヒアリングを実施。

修善寺中学校

学校の現況や地域性について

- 修中は単独で成り立っているため中伊豆、天城とは状況が異なる。また複数小学校からなる点も異なり、修中には中１ギャップがある。
- 修善寺南小学校以外の３小学校は来年には全校生徒が100人を切る。
- 道徳で、相談月間を設け、子供たちに手厚く接するように心掛けている。
- 民生委員や PTAOB の方々による支援団体があり、現在も週に３日、給食を一緒にとったり、備品の修繕等を行っている。
- ふるさと学習について、小学校で地元を、中学校では伊豆市を学習することになる。
- 何をやるにも駐車場の心配がある。参観会、保護者説明会等の雨天時には相当数必要になる。

通学について

- 新中学校が日向地区になった場合、生徒の割合が多い牧之郷方面から電車を利用すると徒歩の距離が長くなり、電車通学が便利ではなくなるため不満が出る恐れがある。
- 牧之郷地区の生徒の自転車通学について、希望者が増えるかはわからないが、バス路線設置の要望が出る可能性がある。
- 現在でも保護者による送りがある。新中学校が日向地区になった場合には保護者による送迎は増える。
- 新中学校の学区は広域になるので、非常時の引き渡しにも配慮が必要。
- 広域になり通学に時間が掛かるので、習い事へ直接行けるような時間を過ごせる場所があるとよい。

部活動について

- 保護者からは、部活に対しての継続・維持の要望がある。
- クラブチームなども多い。クラブチームについては自由参加になっている。

中伊豆中学校

学校の現況や地域性について

- 中伊豆地域の保護者は学校行事の参加に積極的。体育祭では保護者も参加する地域交流種目がある。
- 学校行事では、学級数が少ないため出演者と裏方を生徒全員で行うため、生徒からの応援が少ないのが寂しい。来年からは文化祭と体育祭を１日で行う(緑流祭)。
- 地域学習に関して、筏場のわさび田を見たことがない生徒もいる。わさび田に外国人観光客が来ていることに驚いている生徒もいた。
- 生徒数の割に困り感のある生徒が少なくない。

通学について

- 保護者に送ってもらう生徒の割合が高く、保護者の出勤の時間に合わせて送るため、7:20 頃にはほとんどの生徒が登校している。
- 中伊豆地域から新中学校への通学には、保護者の送迎が 圧倒的に増えると思われる。
- バスの時間に合わせたカリキュラムになる。下校時はバスの時間まで学校にいることになるため、自習したり軽食をとるためのスペースが必要。
- 夏休み、冬休みは、部活のため朝夕だけでなく、下校用に昼の時間帯の便が必要になる。

新中学校への期待

- 天城連山を借景するなど、周囲の自然の眺望に配慮してほしい。大仁中学校は、坂の上にあるので富士山がよく見えるため、普通教室を北向きにしている。
- ぜひ新中学校にも積極的な木材利用を。
- あすなろ忌の観客が少ないことが残念。文豪に触れる機会が学校内にあるとよい。
- 理科室を複数設けることができれば、それぞれを物理、生物、化学に特化させたい。
- 中学校の図書館は、郷土史や情報機能の充実を図り、地域の様々な年代の方々も利用出来たほうがよい。
- 教師も学び続けられる職員室等の環境の整備をしてほしい。
- グラウンドは人工芝だと雨上がりにすぐ使えてよい。

天城中学校

学校の現況や地域性について

- ESD(持続可能な開発のための教育) として天城地域のふるさと学習をはじめて９年目になる。統合した後も伊豆市を対象範囲として続けるのはどうか。
- ESD をはじめたのは、天城地域の子どもたちが地元地域の良さをあまり認識していないことから、地域の学習を通して郷土愛を育むことを目的としている。
- 天城中校歌の作詞者は井上靖。
- 地域性もあってか天城地域の生徒が、新中学校に対して最も中１ギャップを受けると考えている。現在は、高校入学時に高１ギャップを感じる生徒が、統合する３中学校の中で最も多いと思われる。
- 英語の授業でデジタル教科書を利用している。また、英語の授業には毎回 ALT がいる。普通は週１回程度。

通学について

- 現在でも保護者の送りで克己坂（学校手前の急坂）下まで登校する生徒は多い。
- 自転車の通学について、自転車を持っていない生徒もいて、乗ることが出来ない生徒もいる可能性がある。
- 天城中が３中学校の中で、遠距離の割合 (通学が２km 以上でバス通学対象の割合) が 75%と最も高い。
- 小学校と中学校の帰宅時間が重なるとバスが混んで乗り切れない場合があり、また、地域住民から児童・生徒の乗降に時間が掛かり予定が乱れたという地域住民からの苦情があったため、小学校と帰宅時間をずらすように、今年度は２学期から日課変更をしている。
- 新中学校の部活動からの帰宅時間について、天城地区の生徒は他の地域の生徒より早く下校しなければいけなくなることが心配。

新中学校への期待

- 部活は選択肢が増えて良い。
- 克己の石碑は、井上靖も関係するので持って行っても良い。
- 合併前に３中学校で各教科のデジタル教科書を揃えておくと更新のタイミングが合ってよい。

土肥小中一貫校

学校の現況や地域性について

- １～９年生　独自のカリキュラムを組むことができる。
- １～４年生は 45 分授業。５～９年生は 50 分授業。
- １～９年生の縦割りの協力体制がある。８グループ。
- 電子黒板の使い方は教員によって差があるが、使い分けはうまくなっている。
- 独自のカリキュラムとしては、ふるさと学習の時間等。教科については , 指導要領の配列を変えるのは非常に難しい。あまり特別なことや新しい方向に走ってほしくないという保護者からの要望がある。
- 伊豆市内の他校に比べ英語に力を入れているが、身に着けるべき力を確実に身に着けてほしいという保護者の感想もある。実際英語は他校に比べ低学年から先行して行っている。

部活動について

- 小規模校では、チームスポーツは難しい。個人競技でも卓球と陸上に絞られる。
- 社会体育に移行したいが、なかなかうまく進まない。
- 平日と週末で異なる部活に参加している生徒もいる。週末だけ合同チームの練習に参加する。

新中学校との連携について

- 新中学校と土肥小中一貫校との合同授業での交流という考えもあるが、授業の進度調整が必要。技能教科であれば比較的行いやすい。

2．計画条件

2. 計画条件

伊豆市新中学校の計画条件

●学校施設

・学級数
１学年５クラス　15 教室で計画
35 名の生徒がゆったりと落ちついて学べる広さ（9m×9m）を基本とする
（従来の 8mと比較すると、机の間が約60ｃm→70ｃmとなる）

・特別支援学級
３学級（情緒×1 室、知的×2 室）及び通級教室×１室とする

・職員室
生徒が安心して来室でき、教職員それぞれのスペースがしっかりと確保される広さ
非常勤職員や外部指導者の居場所があり、教職員と連携できるレイアウト

・多目的スペース
体育館、玄関、ホール等に学年全員が集まれるスペースを設ける

・特別教室
理科教室及び英語教室は各３室
多目的教室（美術室や技術室・家庭科室等にも利用）
美術・技術・音楽・家庭科は、各１室とする
各準備室、作品室等は、十分な広さとする

・図書・ICT（メディアセンター）
図書と ICT などを融合した、総合的な学習のスペースとする
放課後のバス待ちの生徒の利用等を考えた自習スペースと連携できる

・地域交流スペース
普通教室の 1.5 倍程度の広さの会議室や小ホールとし、昼間に地域の人が利用できるスペース

・給食配膳
給食はセンター方式で、荷受け・配膳スペース、運搬用のエレベータが必要

●体育館等

・体育館
大アリーナ（バレー部、バスケット部が十分な活動ができる広さを確保し、ステージを備える）
小アリーナ及び武道場（柔・剣道場及び卓球・器械体操等ができるスペース）

・地域開放等
夜間・休日は社会体育施設として開放する
校舎に立ち入ることなく地域開放できるようにする

・防災・避難対応
小アリーナ、武道場、大アリーナを段階的に開放して、避難者を受け入れる
・防災倉庫を利用しやすいよう、併設する

●屋外運動施設

・必要施設
200mトラック
100m直線コース
走り幅跳び・助走路・砂場
野球（リトルシニア、一般軟式に対応）
ソフトボール
サッカーコート
テニスコート（６面）
防球ネット

・コート配置
サッカーコートと野球・ソフトボールは別々に配置する
陸上トラックと野球等が重なることはやむを得ない

・プールは不要

・周辺への配慮
グラウンドの砂塵に注意すること
防球ネットの設置（高さ、耐風圧性能、色合いなど）の検討
校舎の影や日照への配慮
テニス等の打球音などの日々連続して生ずる音への対応

●駐車場

・職員・来客用
職員用５０台、来客用１０台　合計６０台必要

・臨時駐車場
イベント時に３００台程度の駐車場が必要
グラウンド周辺やサッカーコートに配置は可能

・調整池
日々の多様な活用の検討と、調整池として利用した後の早期復帰への対策

●その他

・通学バス・送迎車への安全対策
通学バス及び生徒の送迎車用の乗降場を検討する